幼婚約者のセカンドキスが欲しくてたまらないんで、これはもうやるっきゃないですよねって

有絵馬染奈々奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミソジでゴメンねっ【２】Ｓａｖｅ　Ｙｏｕｒ　Ｈｅａｒｔ　～
冴えない三十路男は幼婚約者のセカンドキスが欲しくてたまらないんで、これはもうやるっきゃないですよねってカンジで大変残念な奮闘をするらしいです～

【Ｎコード】
Ｎ９９６８Ｙ

【作者名】
有絵馬染奈々奈

【あらすじ】
甲斐性なしの冴えない三十路男・時臣と、その幼婚約者にして小学六年生の女のコ・瑛花が織り成す、割とどこにでもある残念な日常を描いたコメディー第二弾。瑛花のセカンドキスＧＥＴを目指して、時臣の残念な奮闘が変態ちっくにスタートする！……らしいですよ？

お読みいただくにあたってとりあえず、みたいな？

◆◆お読みいただくにあたって◆◆

？本作は、甲斐性なしの冴えない三十路男と、その幼婚約者である小学六年生の女のコが織り成す、割とありふれた残念な日常を描いたコメディーです。

？血肉沸き踊る冒険活劇や手に汗握る異能バトル、壮大なスケールに心踊るＳＦや精緻なトリックを駆使したミステリ、はたまた甘く切ないラブロマンス等とは一切無縁ですので、予めご了承ください。

？作中に時々変態行為と思しき描写が出てくることがありますので、そういったものが許せない方の閲覧はお勧めいたしかねます。

？本作は全年齢対象ですが、シャレのわかる方の閲覧をお待ちいたしております。

？作者の脳は何か湧いている可能性がありますが仕様です。

？本作の読後にニヤニヤ出来た或いは不快感を覚えた場合は、作者ｔｗｉｔｔｅｒアカウント宛てにお申し出いただければ、何らかの対応を検討する方向で前向きに善処する姿勢を示す機会の整備に関する調整をする可能性を留保させていただきます。

？本作は合成甘味料・着色料等は一切使用しておりません。素材本来の自然な甘みを活かした作者の妄想をご賞味いただけます。

◆◆登場人物紹介◆◆

◇瀬上時臣【せがみ・ときおみ】
年齢：３２歳
職業：武蔵玉川市役所住民課職員
特徴：メガネ。オールバックに撫でつけた髪の生え際が結構哀しいことになっている。あと変態。瑛花にぞっこんラブラブ首っ丈で尻に敷かれている。頭の中は８割方が瑛花のことで占められていて仕事にことは殆ど考えていない。度し難い変態。隠れヲタ。趣味は瑛花の下着ｍｏｇｍｏｇとドライブ。さり気に甘え上手かもしれない。

◇南城瑛花【なんじょう・えいか】
年齢：１２歳
職業：私立晴玉学園初等部６年Ｂ組／時臣の婚約者＝実質もう幼妻（おさなづま）？
特徴：メガネ。腰下まで伸びたサラサラヘアーを左右に分けて緩く三つ編みにしている。運動をする際はストレートに解き、カチューシャで前髪をアップにする。あと胸のサイズが同い年の女のコの平均よりやや小さめ。２０歳年上の時臣を叱るのに躊躇はまったくない。場合によっては手も足も上げる。家事全般をそつなくこなせる優等生。趣味は読書と空手。なに気に甘やかし屋かもしれない。

◇ナレーター
年齢：不詳
職業：本作の？地の文？担当
特徴：基本的に三人称で粛々と進めていくが、時々誰かの心情を代弁してあげたりもする。稀に主役たちにツッコミやイチャモンをつけられるのが悩み。

◇御崎聡一郎【みさき・そういちろう】
年齢：３２歳

職業：自宅警備員（エリートニート）
特徴：メガネ。整髪料ひとつ付けないボサボサの髪に無精ヒゲでどこへでも出歩くヲタ。時臣の悪友にして良き理解者。今期の覇権アニメはどれかということを常に考えている。あとエロゲシナリオに大変煩（うるさ）い。働いてもいないのにどうしてエロゲを買えるのかは謎。ラブコメ好きというお茶目な一面も持つ。

◇ロナルド・ラペイユ・デッゴギーン
年齢：不詳
職業：剛厳流空手道武蔵玉川道場師範
特徴：奇人。南城姉妹の空手の師匠。銃の弾丸を歯で受け止め、突っ込んでくる車を拳で真っ二つにカチ割ることができるとかなんとか。五十円硬貨がとにかく恐いらしい。「ガイジン」呼ばわりされると怒る。

◆◆これまでのあらすじ◆◆

合衆国海兵隊員としてベトナム戦争に従軍していたロナルドは、とある極秘任務でＣＩＡのエージェント、ロジャー・マッケンジーと知り合った。作戦行動中に友情を深めた彼の勧めもあって退役後に来日したロナルドは、沖縄観光中に剛厳流空手の達人・川口剛鐵と運命的な出会いを果たす。彼の人柄とその空手に惚れ込み剛厳流に入門し更に日本に帰化したロナルドは、十数年に渡る過酷な修業の末に免許皆伝の上、師範の資格を得た。数年間の放浪生活の後、ようやく武蔵玉川市に空手道場を開くところまでこぎつけたロナルドの前に、因縁の宿敵である元ＫＧＢ特殊工作員のミハイル・ペトローヴィチが現れたのだった――――

三十路男のお目覚めと瑛花さんの『初めて』の想い出

１２歳の女のコの心理なんて理解しようとしたってなかなかどうして難しい。

なにぶん多感な思春期なのだし、ましてや相手は女のコ。

それでも女性経験豊富なイケメン男子だったらなら、幼い乙女心の機微ってヤツを少しは読み取ることができるのかも知れない。

しかし残念な――――それはもう色んな意味でホントに残念な甲斐性なしの三十路男（ミソジ）なんぞに、そんなデリケートなものを理解するのは至難の業（わざ）だ。

意味不明な難癖つけて怒り狂うクレーマーを柔和な表情で迎え撃ち持てる語彙を駆使して適当に煙に巻いてお帰りいただくミッションや、理不尽な怒りをブチまける上司にペコペコ頭を下げまくりつつおべんちゃらを連発して従順な態度を見せて怒りを鎮めてもらう業務の方がよっぽどカンタン。

だが、理解せねばならない。

読まねばならない。

その乙女心というやつを可能な限り把握せねばならない。

どうすれば笑ってもらえるか。

どうすれば喜んでもらえるか。

どうすれば、

――――キスを許（口づけ）してもらえるか。

目下、瀬上時臣（せがみ・ときおみ）３２歳の攻略目標は、愛しい幼婚約者――――南城（なんじょ）瑛花（う・えいか）１２歳・小学六年生――――のセカンドキス（二度目の口づけ）にあった。

そう。瑛花さんとちゅー（口づけ）したい！　したいったらしたいんじゃあああああっ！
んァ？　ロリコン？　うっせー！
ロリコンじゃねーっつの！　惚れた相手がたまたま12歳の小学六年生だっただけやっちゅーに！
なんか文句あるのか畜生めーッ！
あの小振りで可愛らしいぷるぷるの唇にぶちゅーっとしたいんだよ！　ぶちゅーっと！
もう一度！　いやもっと！
ちゅーしたい！　吸いつきたい！　できればベロちゅーまでしたい！
すっっげ気持ちイイっての！　いやマジ最高だっちゅーの！
蕩けるんだよ！　蕩けちまうんだよ！　イロイロと！
あああああああああ――――っっ！
瑛花さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！

――とまあそんな訳で、甲斐性なしの冴えない三十路男は、今、虎視眈眈（こしたんたん）と瑛花の唇を狙っているのである。

◇◇　◇◇

11月の最終週。クリスマスまで1ヶ月を切った、日曜日の朝。
時臣は頬をペチペチ叩かれる感触と、
「朝ですよ。朝。そろそろ起きてください。まったくもう……。ほらほら、朝です」
という可愛らしさ中に凛とした涼しさを帯びた声で目を覚ました。
まだ重い瞼をなんとか開く。
ぼんやりとした視界は、こちらを上目遣いで見つめている瑛花の整った顔立ちで占拠されている。その表情は呆れと若干の苛立ちに

彩られてジト目。だが頬に朱(あか)みが差していた。
「ん、ようやくお目覚めですか？　そろそろ放して欲しいんですけど」
瑛花は視線をこちらの胸許に落とし、ちょっと恥ずかしそうにモゾモゾと身を揺らす。
――んあ？　はなす？　なにを？
覚醒直後のまったく頭が回っていない状態で、時臣は手脚に少し力を込めてみる。
途端に身体中にとても心地良いふにふにとした柔らかさと温もりが感じられ、シャンプーと石鹸の香りに若干の寝汗というかフェロモンというか『女のコのニオイ』が混ざったほのかに甘い匂いが鼻孔をくすぐってきた。
――いい。これすっげくいい。
ベッドの上、二枚重ねの掛け布団の重みの下で、瑛花の華奢な身体を抱き枕よろしく両手両脚でしっかりホールドしているのだった。左手は瑛花の両肩に回ってその身をしっかりと抱き寄せ、右手は細い腰に添え、両脚は向こうの両脚を絡めとっている状態。こちらが放してやらなければ、瑛花は抜け出すことが出来ないような有様になっている。
――そっか。
ようやく合点がいった。
同居するようになって半年。
それまではベッドに瑛花、床に敷いた布団に時臣がそれぞれ寝るようにしていた。
しかし一昨日の金曜の夜、抱き枕代わりになれと瑛花に言われてからは、このベッドで自分も寝るようになったのだ。そして就寝時には手脚をピンと伸ばしてされるがままに抱き枕役に徹してはいるものの、起床時には自分もしっかりと幼い婚約者の身体を抱きしめているようになっている。いくら「お触り厳禁」と言われていても、かわいい瑛花に抱きつかれていたら自然と抱きしめ返してしまうの

だ。これはもう仕方がない。なにせ寝ている最中のことなんだし。無意識の所業なんだから。
つまり現在の状況は、この世で最も幸せな状態のひとつなのだ。
ベッドの中で愛しい女のコを抱きしめて寝てる。これに勝る幸せなんて、そうそうありはしないだろう。
なるほど。うん。これは最高だ。手放すことなんてとても出来やしない。
「……ふぁ～あ」
欠伸をひとつ。再び瞼を閉じて、
「んにゅ。おやすみ瑛花さん」
甘い匂いを漂わせる小さな身体をぎゅっと抱きしめ直し、その幸せな温もりを互いのパジャマ越しに味わいながら瑛花の頭頂部に頬擦り。絹糸のようなサラサラの髪に鼻を埋めつつ微睡みの中へ戻ろうとする。
えも言われぬ幸福感に胸がいっぱいになりかけたところで、
「起・き・な・さ・い」
「痛…っ？！」
頬を思いっきり抓(つね)られた。
「今何時だかわかってますか？」
瑛花の少し不機嫌そうな声。
「もう9時半です。朝ご飯の支度するんで、起きてください」
「やー」
抱きしめる手脚により力を込めて身体と身体を密着させる。時臣は甘えた口調で、
「日曜なんだしいいじゃんん～。も少しこうして寝てようよぉ～」
言って瑛花の頭にちゅっちゅ、とキスしてみせた。
瞼は意地でも開かない。この心地良い極上の温もりを手放すつもりなどサラサラない。男の意地にかけて。
「じゃ…そーゆーことで」
再度頬を抓られた。

「ダメです。起きてください」
「やーやーやっちゅーに」
「ふ～ん……そうですか。そういう反抗的な態度をとるんですか。わたしに。あなたが」
「瑛花さん好き好き～？」
「……今すぐ起きないと、もう口利いてあげません」
「お、おはよう瑛花さんッ」
男の意地はあっさり放棄。
お目めパッチリ。手脚を弛めて胸許に抱き寄せていた瑛花の顔を見下ろす。叱られた仔犬のような顔つきで、
「も、もう起きたよ？　ほらバッチリ。ね？　ね？」
両手を挙げて降伏を意を伝える。
情けないと言うなかれ。
瑛花に口を利いてもらえないというのは、時臣にとって地獄も同然なのだから。
「最初からそうすればいいんです。まったくもう……」
解放された瑛花は掛け布団を捲り上げ、キビキビとした所作で身を起こした。
腰下まで届く長い髪を手櫛で梳きつつ、
「おはようございます、時臣さん」
こちらを見下ろしてくる。
その仕草がまたなんともたまらなく愛(いと)しく感じ、時臣の頬が自然と緩む。
「瑛花さん…おはよっ」
「……」
「……ん？」
ニヤける頬もそのままにじーっと瑛花の顔を見上げていると、またもジト目で睨まれた。
「まだ起きないんですか？」
「おはようのちゅーしてくれなきゃ起き上がれないなぁ～」

「……」
「……にへ？」
数瞬の間の見つめ合い。
「……まったくもう」
溜め息ひとつ、瑛花は身体を傾けた。
時臣の頭の脇に手をついて覆い被さるように顔を寄せる。長い髪がサラサラと肩口から零れ落ち、二人の視界を周囲から閉ざしていく。
「ホントに仕方のないヒト。――――んっ」
ちゅっ、と。
時臣の左頬にその唇が触れる。
じんわりと広がっていく温かみは、まるで天の甘露のようで。脳髄を甘い痺れで満たしていく。
時臣の顔がだらしなくデレデレになった。
ガバッと身を撥ね上げるや、
「瑛花さんっ？」
瑛花を抱き寄せてその頬やら額やら耳やら瞼やら、とにかく顔中あちこちにちゅっちゅとキスの雨を降らせていく。――唇を除いて。
「瑛花さん？　瑛花さん？　瑛花さんっ？」
「ああもう、鬱陶しいっ」
瑛花は顔を真っ赤に染め上げて両手で時臣を突き放そうとする。
「なんでそう、あなたは、わたしが、わたしのことが、んん…っ」
「むちゅっちゅっちゅっちゅ？　好きだよ？　ちゅっちゅ？
愛してるよ？　ちゅちゅっちゅ？　瑛花さん？」
死んでも放さんとばかりに瑛花の頭の後ろを右手で抱え込み、
「んん――――っ」
時臣は遂には唇を突き出して瑛花の唇を塞ごうと迫っていく。
パシーンッ

即座に左頬を思いっきり引っ叩かれる。
「ななななっ、何考えてるんですか！　ふざけないでくださいッ！　わたしまだそんなの許してません！」
拒絶の言葉とともに腹を思いっきり蹴り飛ばされた。
ちなみに瑛花は姉の瑛実（えいみ）と同じく空手を修得しており、少年部２級・茶帯である。文学少女然とした見た目に反し、それなりの武力を有しているのだ。
その本気（マジ）蹴りを喰らって吹っ飛ばされた時臣は、後頭部を壁に打ちつけてひっくり返る。
「むぎゅうぅぅぅ～」
「――まったくもう。ふんっ」
瑛花はサイドテーブルに置いておいた自分のメガネを手に取り両手で掛けた。左手の薬指には小さなダイヤを戴いた指輪がキラリと輝いている。
ピクリともしなくなった時臣を一瞥すると、髪をバサッと翻してベッドから降り、そのまま足早に寝室を出て行った。
ベッドの上には、締まりない表情を浮かべたままで気絶しかかった時臣の身体が横たわったままである。
「こ、この選択肢は……ダメ…か」
半開きの口からそんな言葉が漏れた。

◆◆　瑛花のノート　◆◆

まったく、まったく、まったくもう。
なんであのヒトはあんななのよ。
ちょっとはムードとかデリカシーとかないのかしら。
なんだってあんな――ホントにもう！
２０歳も年上のクセに、なんで本能丸出しで行動するのよ。

もっとちゃんと考えてほしいのに。
本当になんなの。まったく。
やっぱりわたし……甘やかしすぎなのかしら。あのヒトのことを。
うーん。これはもっとちゃんと教育する必要があるわよね。
はぁ……。ホントに仕方のないヒトなんだから。
わたしの気持ちくらい、ちゃんと考えてほしいのに。ちっともわかってくれないんだから。
まったくもう。
あ～あ。
あの時は、あの時は――――ちょっとだけ、ちょっとだけはいいなって思ったのに。よかったのに…ね。
ホントに……ホントにもう！まったくもう！

◆◆　　◆◆

「婚約指輪を買いに行こうね」

時臣がそう言い出したのは、瑛花の両親に婚約を許された日の翌日の夕方のことだった。
奇しくも同じ日曜日。
午前中から二人で実家と『こちら』を何度も行き来して瑛花の荷物をあれこれ移し終え、一息ついてお茶をしていた最中のこと。荷物の移動には時臣のジャガーを使ったため、何往復もかかった結果半日仕事となったのだ。
「わたし、まだまだ成長期ですからそんなの要りません」
そう言ってみたものの、
「いいからいいから。とりあえず見るだけでもさ」
時臣は半ば無理矢理――――彼にしてみれば珍しいことに――――瑛花を引っ張って、この辺りでは一番大きなターミナル駅に隣接したデパートへと赴いたのだった。

ジュエリーコーナーにはいくつものブランドの店舗が連なり、煌びやかな宝石やら装飾品やらがズラリと陳列されていた。小学六年生とはいえ女の性質(さが)か、これには瑛花も目を奪われずにはいられなかった。

あれやこれやと眺めていく内に、とある指輪に心惹かれた。

それはプラチナ製のリングが流麗なウェーブを描いて小振りなダイヤを上下から挟み込んでいるデザインの一品。凝った細工こそ施されてはいないものの、シンプルが故の確固たる美しさがとても印象的だった。

瑛花が食い入るようにそれを見つめていると、後ろから時臣が顔を覗かせてきた。

「いいのあった？　　ん、それ？」

そう言うや時臣はすぐさま手近の店員に声をかけた。

「すみません。これなんですけど。このコのサイズに合うものってありますか？」

その女性店員――――とても美人だったのを瑛花は今でも覚えている――――は時臣が肩を抱いてみせた瑛花を目にした瞬間「えっ？」という驚きをほんの少し顔に浮かべはしたものの、そこは歴とした販売員(プロ)。すぐさま極上の営業スマイルを浮かべて、

「まずはサイズをお計りいたしますね」

と言って計測用のリングの束を取り出してきた。

初めての経験に緊張して胸をドキドキさせる瑛花を置いてきぼりにテキパキと事は進んでいき、程なくピッタリのサイズの指輪が自分の左手薬指に嵌っていた。

「わぁ……っ」

店内照明を受けてキラキラと輝く０．２カラットのダイヤモンドとプラチナのリングは、弱冠１２歳の瑛花にとってこれまで感じたことのない類(たぐい)の興奮と恍惚を味わわせてくれる。

左手を掲げて角度を変える度に煌めくその輝きに、目も心も奪われ自然と頬が上気してしまう。

「気にいったみたいだね、瑛花さん？」
声をかけられるまで我を忘れていた。
ハッとして振り返ると真後ろにはニコニコ顔の時臣がいて、顎に右手を当ててうんうんと頷いている。
「ダイヤも付いてて丁度いい…かな。あー、すみません。これ、いただきます。ああ…このまま着けて行きますんで」
数秒後には店員に向かってそう言っていた。
瑛花は慌てて指輪を外すと時臣の手を引っ張った。
「ななな、なに言ってるんですか！　こんな高そうなのいただけませんッ」
「んん～？　でもステキじゃない。気にいったんでしょ？　俺もいいと思うよ」
「そ…それは、まあ……」
「じゃあ、そーゆーことで。これ、買おうね」
「……はい」
コクンと頷いた次の瞬間、
「15万7，500円でございます。お支払いは――」
「あ、カードで。一括でお願いします」
という店員と時臣のやりとりが聞えて瑛花は蒼然となった。
15万といえば時臣の月給の6割近い。
そんな高価なものを買わせる訳にはいかない、と焦った。
「と、時臣さん！　そんなの高いものいただくわけにはいきません！　ダメです！」
上目遣いにそう叫ぶと、時臣は瑛花の目の前に屈み込んで肩を抱いてきた。顔を寄せ耳元で、
「――瑛花さん。瑛花さんの前でちょっとは甲斐性あるトコ見せたいんだよ。だからここはカッコつけさせて？」
そう囁いてきたのだ。
ドキッとした。
胸が高鳴った。

思わず顔がポッと熱くなった。
「で、でも……」
「いいから、ね？」
顔を離した時臣は拙いウインクをしてみせた。

その瞬間――
瑛花の中で、カチリ、と何かのスイッチが入った。そんな風に感じられた。

気がついた時には。
瑛花は自ら時臣の頭に両手を回して顔を引き寄せ、唇を重ねていた。
瞳を閉じてさらに強く吸いついた。
タバコのニオイと海を思わせる香水の仄（ほの）かな香りがした。
お互いのメガネがぶつかり合うカチンという硬質な音が今でも耳に残っている。

会計を済ませ、専用のケースとブランドのロゴ入りの紙袋を受け取った二人は、デパートの立体駐車場にいた。
瑛花は自分の左手薬指に煌めく指輪をポーッとした表情で眺め続けていた。
時臣に右手を握られフワフワとした足取りでジャガーの助手席にエスコートされる。
ドムン、という独特の音とともにドアが閉められ、回り込んだ時臣が運転席に座ってからも瑛花はポワポワしたままだった。
「随分気に入ったみたいだね。よかった、いいのが見つかって」
身を乗り出して瑛花のシートベルトをセットしながら、時臣がそう言ってきた。

その時の瑛花の頭の中は、キラキラと光を反射する指輪と、さっき自分からしてしまったキス（口づけ）のことでいっぱいだった。
ご機嫌な様子で自分のシートベルトを装着している時臣を横目でチラリと見やる。
「――時臣さん。あ、あの……この指輪、ありがとうございます。大事に…大事にします」
「うん。すっごく似合ってるよ」
「それと――」
瑛花は小さく呟いた。右手で自分の唇を撫でながら。
「さ、さっきのアレ。わたしの……わたしの、ファーストキス、なんです。お父さんにもお母さんにもしたことないんです。誰にも……したことなかったんです。……だから、初めての、キス、なんです」
想い出しただけでも顔中が火照る。瑛花は両手を膝の上で組み合わせてモジモジと身じろぎしてしまう。
女のコの大事な大事なファーストキス。
それを自分からしてしまったのだ。しかも唇を重ねるだけではなく、強く吸いつくようなことまでしてしまった。
それもあのような公共の場で。
本当に顔から火が出そうな気分だった。
しばらく車内を沈黙が覆った。
隣に目をやると、もの凄く嬉しそうに目を細めた時臣が、真正面を向いたまま自分も唇を指先でなぞっていた。何度も、何度も。
そしてやおら瑛花に顔を向け、にっこりと微笑む。
「……そっか。瑛花さんのファーストキス、もらっちゃったんだ。俺が、ファーストキスの相手……か。ぬふふ？　だったら、その指輪くらいじゃ全然足りないね？　瑛花さんのファーストキスには、ね？」
「そそそそっ、そんなの、知りませんっ」
瑛花は気恥ずかしさに俯いてしまう。

「そう？　ん～。これからいっぱい、いーっぱい、愛情注ぐから。俺の可愛いかわいい瑛花さん？」
時臣はそう応えながらエンジンをかけた。
瑛花の心はまだポワポワしたままだった。まるで宙に浮いているような。

――――これが、瑛花が時臣に許した最初のキス（口づけ）の想い出である。

その後正気に戻った瑛花が最初に思ったことは、
「せっかくの指輪も学校には着けて行けませんね」
ということだった。
それを聞いた時臣は翌日の月曜日の朝、職場に電話を入れて午前の時間休をもらい、指輪を着けた瑛花と一緒に晴玉学園初等部の校舎に入った。
瑛花の案内で職員室へ赴き、担任の久我亜希子（くが・あきこ）先生と何やら話をしていた。
そして、何がどうなったのかは未だ不明だが、瑛花は指輪を着けたままで学校生活を送ることが認められたのだった。
以来、体育の授業やお風呂に入る時を除いて、瑛花の左手薬指にはお気に入りの婚約指輪が嵌められている。
時臣にもナイショだが、時々誰も見ていないところで、指輪にキスしたりしているのだ。

三十路男の妄想と瑛花さんのお師匠

瑛花の両親である南城英隆（なんじょう・ひでたか）３４歳と理緒（りお）３１歳の夫婦は、時臣にとっては母校・命路大学での同じサークルの先輩後輩である。なので英隆のことは「南城先輩」と、理緒のことは「理緒ちゃん」と学生時代と同じ呼び方をしている。

瑛花との関係上、義理の父母ということになる――まあ実際にはまだ気の早いことではある――訳だが、とてもじゃないがそんな風には呼べないし思えない。大体トシも近いんだし。それにそもそも、実はあの二人はなんとなく苦手なのだ。時臣は。

――懐かしき学生時代。南城先輩はどういう訳だかさっぱり解らなかったが時臣をかわいがってくれ、理緒ちゃんは理緒ちゃんで「ガミ先輩っ、ガミ先輩っ」と何故だか懐いてくれていた。それでも微妙に苦手だった。なにしろ二人とも学内では有名人だったし、学生結婚して子供まで作っていたのだ。住んでるセカイがあまりにも違い過ぎた。

まさかその二人の子供の一人に惚れ込むことになるなんて――いやはや運命とは皮肉なものである。

だがまあ。

そんな二人に時臣が感謝していることが３つばかりある。

１つ目は言わずもがな、瑛花というかわいい女のコを産んでくれ、ここまでかわいく育ててくれたこと。

２つ目はこれまた安直だが、自分と瑛花の婚約を認めてくれたこと。

そして３つ目。それは、瑛花にちょっと変わった夫婦像を植えつけてくれたこと、である。

朝食を終えた時臣と瑛花は、部屋着姿でリビングのソファに座ってくつろぎタイムに入っていた。
このくつろぎタイムでの瑛花の行動が、ちょっと変わっているのだ。
時臣はソファに普通に座っている。
その膝の上に瑛花は腰を下ろしているのだ。
同居生活始めの頃は少し恥ずかしそうにしてはいたものの、今ではごく自然に、当たり前のような顔で平然と。時臣を椅子代わりにしている。
ふとももの上に深くお尻を沈め、小さな背中は完全に時臣の胸に預けていた。
ぶっちゃけ密着。
膝の上抱っこ状態なのである。
これは何も時臣から要求してのことではなかった。
瑛花が自発的にしていること。
なので、どれだけ密着（ベタベタ）しようとも、これに関しては瑛花に叱られる心配など全く無いのである。
さすがに最初は割と面食らって訊いてみた。「いきなりどうしたの？」と。
訊かれた瑛花はきょとんとして、
「家では妻は夫の膝の上に座るのが普通ですよね？　お母さんも、いつもお父さんの膝に乗ってました」
と返答してきた。
両親に許しを得て婚約した上での同居生活。
戸籍上はまだ夫婦になれなくても、
瑛花にとっては既に、
「わたしは時臣さんのお嫁さん」
ということらしい。

そう思ってくれてるだけでもめちゃめちゃ嬉しいのに、さらにこの『密着膝の上抱っこ』である。
一昨日からスタートした就寝時の抱き枕役を除けば、これまで唯一、ベタベタしても叱られない至福の時間。
わざわざ「ちょっと違うんじゃないかな」などと訂正するような愚行は犯していない。
こんな幸せをむざむざと手放すものか。
「瑛花さん？」
両のふとももの付け根辺り――というよりぶっちゃけ股間の真上――にキュッとしたお尻の感触を味わいながら、時臣は両手を伸ばして瑛花を肩越しに抱き竦めた。掌を瑛花の下腹部に当てるようにすると、自分の腕が丁度瑛花の慎ましい胸の上にくるのだ。言わばわざとじゃないおっぱいタッチ。まあ、わざとやってるのだが。
ふにふにとした幸せな柔らかさがとても心地良く――ちょっとアレがムクムクしてきたりする。そもそも瑛花の温もりがすでにサイコーだ。自然と頬がふにゃふにゃと弛んでしまう。
「瑛花さん。今日はどうしようか？　どこかドライブにでも行く？」
天気は晴れ。絶好のドライブ日和である。
「河口湖の方にすっごく美味しいチーズケーキが食べられるお店があるらしいんだけど」
聞いた話では本当に美味しいチーズケーキらしい。特にカボチャのチーズケーキが絶品だとか。
それを一緒に食べて瑛花のご機嫌をとり、さらに夕暮れの湖畔でムードを盛り上げていけば…あるいはちゅーをＯＫしてもらえるのではないか――という算段だ。
「うん。そうしよう？　今から支度して出れば――」
壁掛け時計に目をやると午前１０時４２分。
「ちょうどおやつの時間くらいには現地に居られるだろうから。ね

？　そうしようよ瑛花さんっ」
瑛花の後頭部に頬擦りしながら提案する。
ちなみに膝の上抱っこの状態においては、よっぽどのこと――例えばおっぱいを揉むとか、うなじをぺろぺろ舐め回すとか、お耳をはみはみするとか――に及ばない限り、こうしたスキンシップはお咎めなしである。そのあたりもきっと、南城夫妻が子供たちの目も憚(はばか)らずにいちゃいちゃしていたんだろう。そう時臣は踏んでいる。
ありがたい話だ。心底そう思う。子供の情操教育かくあるべし！
「言ってませんでしたっけ、わたし」
両手に持った編み棒を淀みなく操り、毛糸の編み物をしながら瑛花が答える。
「今日は午後から道場でお稽古ですよ？」
「えーっ」
「えー、じゃありません。だからドライブはまた別の機会ですね」
こちらを振り向きもせず、
「あなた、わたしの予定くらい把握しておいてください。仮にも…んん、旦那さま……なんですから。大体そもそも、」

――旦那さま？
――旦那さま？？
――いい。すっっごく、いい。
時臣、ここで夢見心地。
ぽわわ～ん、と脳裏にあれこれ妄想が浮かび上がってくる。

『おかえりなさい、アナタ？　ん…ちゅっ？』

『お風呂にします？　ごはんにします？　それとも……わ・た・し？』

『あんっ……だ、ダメです、よ……んぁっ？……はぅん…こ、こんなの…んんっ？』

『――――きて、ください？　　アナタのぜんぶ……わたしが受けとめてあげます？』

『あぁ…んっ？　　あ、アナタが欲しかったしあわせ……みんなあげちゃいます？』

「――――なんですからね。って時臣さん、聞いてますか？」

「……へ？」

ハッと我に返ると、ジト目で振り向いている瑛花にペチペチと頬を叩かれていた。

「ん、わたしの話……聴いてませんでしたね？」

「い、いや……そんなことは」

冷や汗が頬を伝う。

ぶっちゃけミスったといっていい状況だった。

自分の話を聴いてもらえないというのは、瑛花にとってかなりイヤなことなのだ。

話を聴いてくれない＝相手にされていない＝コドモ扱いされてるんじゃないか、と感じるようだ。

時臣は瑛花を決してコドモ扱いしない。瑛花のことを常に最優先で考えて、瑛花の話は何でも聴く。

これは瑛花にとってかなり好感度が高い、時臣の数少ない美点のハズ。

――――ヤバい。割とピンチかも。

「じー……」

「あはははは……」

「時臣さん。あなた、鼻がピクピクしてます。それって、えっちなことを考えてる時のクセです」
「え……いやいやいや。まさか俺が瑛花さんの話を聴かずにえっちなことを考えてたなんてそんな」
見る見る内に瑛花の眉間にシワが寄っていく。細身のフレームレスメガネのブリッジを指で押し上げ、
「ん、じゃあテストです。わたし、さっきなんて言いました？」
と訊いてきた。
「えええええっ、えっと……ええっと……瑛花さんが俺の？？？？を？？？？？してくれて、それで瑛花さんの？？？？に俺の？？？？を？？？んで、？？の一番？？で？？？？？？？？？？？？を全部？？？？？してもいいよって――」
「ば、バカ！　そそそそっ、そんなえっちなこと誰が言うんですかぁぁぁぁぁッ！」
顔中真っ赤になった瑛花は、ふとももの上で器用に身を反転させると、とても小学六年生女子とは思えない華麗なアッパーカットで時臣の顎を鋭くエグり上げた。
「グは――ぁ！？」
時臣、完全KOである。
意識がブラックアウトしていく中で、
「サイっっテーです！　まったくもう！」
という瑛花のプンプン怒る声が聞こえた――気がした――。

◇◇　◇◇

シルバーの『にゃがー』ことJAGUAR（ジャガー）・X－TYPEが、秋晴れの午後の空に輝く陽の光を浴びながら武蔵玉川市内を東に走っていた。ボンネットの先端では「がおーっ」とでも言いたげに獲物に襲いかかるポーズをしたネコ科のマスコットがキラリと光を反射している。

その車内ではステアリングを右手で握りながら、時臣が苦笑いをしていた。
「だからホントごめんってば。そろそろ機嫌直してよ瑛花さん」
「ん、もう怒ってません」
「怒ってるじゃん」
「怒ってません。しつこいです」
瑛花は助手席で不機嫌そうに唇を尖らせる。膝の上には大振りなスポーツバッグを抱えていた。ジト目で右側――時臣の苦笑顔を睨む。
「大体なんですか、その人を小馬鹿にしたようなカオ。わたしのことコドモっぽいとか思ってませんか？　思ってますよね。すごくイヤな感じです」
「思ってません。それに顔は生まれつきこんなんだって」
とほほ…っといった風に時臣が身を前後に揺らす。総革張りのシートが、ぎゅむっ…と音を立てた。
「えっちなのがいけないんです。あんな……あんなえっちなこと考えてただなんて、まったくもうっ」
「だからゴメンって。もう何度も謝ってるじゃない。瑛花さんがご機嫌ナナメだと、俺…困っちゃうよ」
「ふぅ…。ホントしょうがないヒト」
瑛花は溜息を漏らすと前に向き直る。
「今度あんなえっちなことを口にしたら、もう口利いてあげませんから」
「そんなぁ～。瑛花さん最近そればっか。ちょっとくらいいいじゃん……あのくらい」
「あなたへの一番のおしおきですから――って、またあんなこと言うつもりなんですか？」
「そ、それは…ほら、なんていうか……その、ねぇ？　言うっていうかするっていうか、今後の進展次第ではイロイロとごにょごにょ……」

「ありませんからッ。そんなの」
「えーっ」
「えー、じゃありませんッ」
「――――っと、着いたね」
二人を乗せたジャガーは車道の路肩側に寄りながら減速し、左に曲がって歩道を越える。砂利敷きのやや手狭感の否めない駐車場に入って停まった。

木造平屋建ての古びた純和風家屋の門柱に『剛厳流空手道武蔵玉川道場』と縦に墨書された看板が掲げられている。
時臣はその達筆な文字を横目にしながら、前を行く瑛花の背中を追って敷地内へと進んだ。
正面玄関を左手に逸れて建物をぐるりと回り込み、結構な長さの縁側に辿り着く。雨戸もガラス戸もすべて開け放たれた状態の板敷きの向こうには、何畳あるだろうか、かなりの広さの座敷が見えている。鮮やかなブルーの畳が敷き詰められたそこは薄暗く無人だが、ピンと張り詰めた空気が漂っていた。上座と思しき方の天井近くには神棚と『美・愛・心』とこれまた達筆で墨書された大きな板が見てとれる。
慣れた様子で靴を揃えて縁側に上がった瑛花は、
「先生！　ロナルド先生！」
と奥に向かって声を響かせた。
すると――――
「Ｏｈ！　プリティレディ・エーカ！　来ましたネ！」
微妙に金属質を思わせる大声を轟かせ、漆黒の帯を腰の辺りに締めた白い道着姿のマッチョな白人男性がドタドタと裸足を踏み鳴らして出て来た。

お腹の前で手を組み、真っ直ぐ背筋を伸ばした瑛花の目の前までやってきたマッチョは、
「Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ！　レディ・エーカ、今日はイチバン乗リですヨ！」
と言って破顔した。
その顔つきはどことなくスティーヴン・セガールに似ている。角刈りにした鈍い金髪と碧眼、そして大柄な体躯はどこまでも筋骨隆々マッチョマン。
このマッチョこそ、瑛花と姉の瑛実の空手の師匠、ロナルド・ラペイユ・デッゴギーン師範である。
「こんにちは先生。今日もよろしくお願いしますっ」
瑛花はペコリと頭を下げた。
その表情は可愛らしい微笑み。
縁側に腰を下ろした時臣は、そんな瑛花を横目で見ながら少し不機嫌な顔になった。
瑛花はこの胡散臭いマッチョを尊敬している。しかもマッチョを見る時の表情がまるで「お慕いしてます？」というような雰囲気なのだ。ハッキリ言って、おもしろくない。むしろムカつくのである。
――大体なにが「プリティレディ・エーカ」だ。馴れ馴れしい。俺の瑛花さんだっつの！
だからちょっと刺々しく、
「おぅおぅセンセぇ。俺の瑛花さんをヨロシクご指導してくださいや。怪我なんかさせんでくださいよォ？」
と言ってやった。
「オゥ！　ミスタ・セガーミ！　ダイジョブ、ダイジョブですヨ！」
こちらの皮肉をまったく解さず、ニコニコ顔での返事。
それが益々ムカついて、
「チッ……この腐れ外人め」
と思わず舌打ち混じりに呟いてしまった。

途端、

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｯ！　ノゥノゥノォォォォォォォォォォォンッ！　ワタシはガイジンなんかじゃありません！　国籍ニッポンですヨ！　もうズイブン前にニッポンに帰化してますヨ！　Ｂｅｃａｕｓｅ！　アイム・ニッポン人！　そこラのファッキン女子高生なんかよりずっと長くニッポンで暮ラしてますヨ！　ムッキィィィィィィィィィィィィィッ！　ファック！　ファック！　ファック！　ファック！　ファァァァァァァァッツキュゥゥゥゥゥゥゥゥゥッツ！！！！」

マッチョは顔を真っ赤にして地団駄を踏んだ。こちらを修羅の如き形相でギロリと睨みつけてくる。青白い炎のようなオーラが滲み出ていて、今にも飛び掛かってきそうだ。

その勢いに圧倒された時臣は、慌てて掌を前に突き出す。

「いやいやいやいやいやいや、これは失言でした！　すみません謝ります！」

「そうですよ時臣さん。ちゃんと先生に謝ってください」

瑛花までもが腰に手を当ててこちらを睨んでくる。

たまらず時臣は平身低頭した。

「と、とんだご無礼いたしました！　心よりお詫び申し上げますっっ！」

「Ｏｈ……わかってくレレばいいのですヨ」

マッチョは怒りをおさめたのか、口調が急に穏やかになった。時臣の傍にやってくると、

「顔を上げてください、ミスタ・セガーミ。……ワタシ、ニッポン人。ＯＫ？」

「ＯＫ？　ミスタ・セガーミ？」

肩にゴツい手を置き、ニカッと笑顔になった。

重ねて問われ、時臣は冷や汗混じりで頭を上げる。

「お、おーけー」
「Ｇｏｏｄ！　ここはニッポン。和のクニです。お互いを思いヤル心を忘レないでくださいネっ」
「は、はぁ……」
危ないところであった。なにせ相手は空手の師範。しかも話によれば、アメリカ合衆国海兵隊員としてベトナム戦争に従軍していたという猛者だ。下手をすればなまっちょろい時臣ごとき、畳鰯にでもされかねない。
「あ、そうだ先生」
二人を見ていた瑛花が、思い出したようにスポーツバッグから茶封筒を取り出した。
「来月分のお月謝です」
両手でそれを差し出す。ちなみにこの道場の月謝は小学生だと７，３５０円である。
受け取ったマッチョは封筒の口を開け、逆さまにして掌の上で軽く振った。
「サンクス、レディ・エーカ。念のため確認させてくださいネ」
そのゴツい掌に、チャリンチャリンと小気味好い音をたてて小銭が転がり落ちる。
「ヒー、フー、ミー、Ｏｈ…丁度あリま、す、ネ――――アォウッ！」
突如、マッチョは顔を真っ青にして小銭を放り出した。
縁側の板敷きの上に百円玉が３枚と五十円玉が１枚転がる。
「せ、先生？」
不思議そうな顔をする瑛花。
時臣も「なんじゃらほい？」と訝しむ。
マッチョは二・三歩後退（あとずさ）るや尻餅をつき、ガクガク震えながら転がった硬貨たちを――――その中の五十円玉を指差した。
「オゥマイガッ！　や、ヤツが……ヤツがいますっっ！？　ひーッ！　ガッデムファッキンサノバビッチ！？」
「先生落ち着いてくださいっ」

駆け寄る瑛花にマッチョは涙まじりで、
「オゥ、レディ・エーカ！　五十円玉は入レたラダメダメと言っておいたハズですヨ！？　ヤツはダメです！　ナニか企んでます！　地獄の使者ですヨ！　ノォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッ！！？」
と叫ぶと四つん這いになって座敷の奥にガサガサっともの凄いスピードで逃げ込んだ。
隅っこまで辿り着くと膝を抱えて丸くなり、何事かブチブチ呟き始める。
「せ、先生……」
瑛花は尊敬する師匠の突然の奇行に呆然と立ちすくむ。
隣に立った時臣はマッチョの丸くなった背中を眺めながら、
――こいつアホなんじゃね？
と内心で呆れた。

その後、まるで戦争後遺症の兵士のように恐慌状態で意味不明なことを呟き続けていたマッチョを、時臣と瑛花はなんとか落ち着かせることに成功した。
件（くだん）の五十円玉は時臣が十円玉5枚と交換することで、なんとか月謝も受け取ってもらえた。
「ちょっと頭を冷ヤしてきますヨ……」
マッチョはそう言い残して屋敷の奥に引っ込んでしまった。
瑛花は更衣室代わりになっているという奥の間に入って道着に着替えている。
座敷の畳の上に胡座をかいた時臣は、独りボーッとしていた。
まだ練習時間には間があるのか、道場生は誰も来ない。
鳥の囀りや木の葉が風に揺れる音だけが聞こえる静かな座敷。
ふと、
――瑛花さんの着替え覗いちゃおっかな。
そんな考えが過（よ）ぎった。

しかしすぐに頭(かぶり)を振る。
以前お風呂を覗いた時は本当に口を利いてもらえなかったのだ。二日間も。あの時の苦しみと切なさを忘れたわけでもあるまいに。
「や…でもさ。ちょっとだけ、ちょっとだけなら大丈夫じゃね？」
……どうやら学習能力は低いらしい。
「うるせー。外野は黙ってろっての。確か今日の瑛花さんはベビーピンクのフリル付きパンツを穿(は)いてるはずなんだよな。……じゅるり」
時臣はやおらいやらしい眼つきになると、この男にしては稀なる敏捷性を発揮して音もたてずに奥の間へと続く襖に忍び寄った。屈み込んで襖に耳を当てる。
「この向こうで瑛花さんがお着替えシーンを……むふふ？」
「なにしてるんですか？」
「ひぐぅッ？！」
いきなり背後から声をかけられ時臣は跳び上がった。
振り向くとそこには茶色の帯を締めた道着姿の瑛花がきょとんとした表情で立っている。
普段は三つ編みにしている髪を下ろしてストレート。さらにカチューシャで前髪をアップにしている。白い額がなんともかわいらしい。
「ええええっ、瑛花さん？！　着替えてたんじゃあ……」
「ええ。着替え終わって、ちょっとお手洗いに行ってたんですけど――って、まさか」
「べべべべべ、別に何もないよ？　なぁ～んも、ないよ！　あはは…はははははっ」
「ふ～ん…ならいいんですけど。もしわたしの着替えを覗こうとしてたんだとしたら、大変なことになりますからね？」
腰に手を当てた瑛花にジト目で見られ、時臣の背筋に冷や汗が流れ落ちる。
誤魔化すようにポンっと手を打ち、

「あ、そうそう。俺さ、見学してもいいかな？　どうせ予定もないし。瑛花さんの空手の練習って見たことないじゃない？」
と話を逸らして訊いてみた。
言って自分でもナイスアイデアだと思う。
空手の道着を着た瑛花は凛とした佇まいでとっても美味しそう。これが練習で動き回って手脚を上げたり振り回したりするのは、きっとものすごく絵になることだろう、と。
さらには汗びっしょりになったりしてそれもまた――じゅるり？
瞬時に色んな妄想が頭を過るが、
「ダメです」
という瑛花の一言で霧散してしまった。
「えー、なんで？」
「時臣さん。また鼻がピクピク動いてます。えっちなこと……考えてましたね？」
じーっ、という視線が痛い。
「そんなえっちなヒトには、神聖な道場でのお稽古なんて見せられません。終わるのは6時半ですから、その時に迎えに来てください。帰りに一緒にお夕飯の材料の買い出ししましょう。はい、じゃあ出てってください」
瑛花はパンパン、と手を叩いて追い討ちをかけてくる。
「えーっ。瑛花さんの勇姿見たい見たい」
「時・臣・さん？」
「……わかりました」
にっこり笑顔にマジな瞳で瑛花に言われ、時臣はそれ以上駄々をこねるのを諦めざるを得なかった。

砂利敷きの駐車場に戻った時臣は、ジャガーに乗り込むと羽織っているジャケットの左の内ポケットに右手を入れた。
黒いスマートフォンを取り出し、タッチパネルを操作する。電話ボタンに触れ、履歴からとある人名を選んで通話を開始。耳に当て

て待つこと7コール目で相手が出た。
『うぃーす』
寝起きなのか、いやにくぐもった声である。
だが時臣はそんなことにもお構いなし。
「おいーっす。今電話平気？」
『あぁ……。なんか用？』
「ちっと時間空いちまったから、暇潰しにファミレスあたりでダベらねぇ？」
『……カネがない』
「ドリンクバーくらいはゴチるからさ」
『んだよ…たりぃなぁ。フィアンセちゃんといちゃついてればいいじゃん』
「瑛花さんは空手の練習。んで俺、追い出された」
『ザマぁｗｗｗ　リア充爆発しろｗｗｗｗｗ』
「るせー。貸してるカネ、今すぐ取り立てんぞ？」
『わぁーったよ、ったく。んで？　オレはどうすりゃいいの？』
「迎えに行くから味噌汁で顔でも洗って待ってろ」
『あいよー』
ブツッ…
通話を終えた時臣はスマートフォンを内ポケットに仕舞うと、
「おっと、そうそう」
忘れてたとばかりに身を乗り出して助手席シートの座面に頬擦りをし始める。
「瑛花さんのお尻が乗ってたトコロ？　ぬふふふふ？」
すりすりすりすり……
ひとしきり頬擦りを楽しむと、ニヤついた表情のままで元の位置戻る。
今度は左手をジャケットの右の内ポケットに突っ込んだ。
取り出したのは純白のパンツ。フリルでかわいらしく縁取りが施され、前面上部の真ん中にはピンクの小さなリボンが付いている。

これはもちろん、瑛花の使用済みパンツコレクションのひとつだ。
そのお尻の部分に顔を擦り付けて思いっきり匂いを嗅ぎまくる。
「すーはーすーはー？　んん～？　いい匂い～？　すーはーすーはー？」
二・三分ばかりそうしてから、
「ぬっふふっふふ～？」
鼻歌混じりに今度はそれを口に銜(くわ)えた。
「んじゃ、出ますかねぇ」
独りきりの車内で変態行為をしながらエンジンをかけ、すぐさまアクセルを踏み込む。
変態オーナーに駆られたジャガーは、砂利を踏み鳴らして発進したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9968y/

ミソジでゴメンねっ【2】Save Your Heart ～冴えない三十路男は幼婚約者のセ

2011年11月30日02時50分発行